

漢文句法「置き字・訓読のきまり」確認テスト | 定期テスト対策 | 誰でも古典塾

解答・解説

問1 順接。前の「学ぶ」と後の「習ふ」とを自然につなぐ。「而」自体は読まないが、その順接の働きは「学びて」の送り仮名「て」となってあらわれている。

問2 学んで（学ぶときには）、おりにふれてこれ（学んだこと）を復習する。

問3 逆接。「千里の馬は常に有れども（=いつもいるけれども）」と、前後が反対の内容でつながっている。「而」の逆接の働きが送り仮名「ども」にあらわれている。

問4 場所（起点）をあらわす。「藍より取る」と、藍という出どころ（起点）を示している。

問5 比較をあらわす。比較の意味は、書き下し文の「虎よりも」という語にあらわれている。

問6 過酷な政治は、虎（に襲われること）よりもおそろしい。

問7（例）「苛政猛於虎」は「於」が比較をあらわすので「苛政は虎よりも猛なり（虎より残酷だ）」と比較の意味で読める。一方「於」がない「苛政猛虎」では比較を示す字がなく、「苛政・猛虎」のように語の関係があいまいになり、「虎よりも」という比較の意味を正しく読み取れなくなる。「於」は読まない置き字だが、比較の関係を示す重要な働きをしている。

問8 対象をあらわす。「人に施す」と、動作の及ぶ相手（対象）を示している。

問9 己の欲せざる所を、人に施すこと勿かれ。

（置き字「於」は書かない。「於人」は「人に」と読む。）

問10 自分がしてほしくないことを、（同じように）他人にしてはならない。

問11 逆接。「和して同ぜず（=調和するが、むやみに同調はしない）」と、前後が対立する内容を結んでいる。

問12 君子は和して同ぜず。

（置き字「而」は書かない。その働きは「和して」の「て」にあらわれている。）

問13 立派な人物（君子）は、人と調和はするが、わけもなく（自分を曲げて）同調することはしない。

問14 ①而／②而／③於／④於／⑤於／⑥而／⑦而／⑧矣／⑨乎／⑩焉／⑪而・矣／⑫而。

これらはいずれも訓読では読まず、書き下し文にも書かない置き字である。

問15 ⑧⑩の「矣」は文末（語末）について、断定・強調の調子を添える置き字である。読まないが、文を言い切る働きをもつ。

問16 いずれも置き字なので、書き下し文では書かない。⑩は「我が師有り」、⑨は「仁は遠からんや」と、「焉」「乎」は字としては書き下さない（⑨の「や」は「哉」による。「乎」は読まない）。

問17 ③ 青はこれを藍より取る。 ④ 苛政は虎よりも猛なり。

（いずれも置き字「於」は書いていないことに注意。）

問18 イ。「而」は読まない置き字だが、その順接・逆接の働きは「て」「ども」などの送り仮名となって訓読にあらわれる。(アは「矣・也」など語末の置き字、ウは返り点の説明で誤り。)

問19 「於・于・乎」は読まない置き字だが、その意味は送り仮名にあらわれる。例えば④「於虎」は「虎よりも」と読み、「よりも」という送り仮名に比較の意味があらわれている。(③「於藍」なら「藍より」の「より」に起点の意味があらわれる、なども可。)

問20 (例) 置き字とは、訓読のときには読まず、書き下し文にも書かないが、接続・場所・比較・断定などの意味を文に添える字のことである。